

# あなたが地域の主人公

その時、どこで何をしていたか。忘れられない日がある。

20年前の1月17日、早朝にもかかわらず私は車を運転していた。ラジオの臨時ニュースで、関西で大きな地震があり数人の死者が出た、と聴こえてきた。しかし、その放送の後、遅々として明確な情報は入らなかった。何かと

## 忘れ得ぬ日から

### 顔の見える関係づくり

んでもないことが起こったという不安感を今も覚えている。阪神淡路大震災―死者6千400人超。4年前の東日本大震災とは全く様相の違う大都市直下型地震だっ

規模災害には行政の力だけでは対応できない、市民ボランティアや市民組織の力が重要だと思い知ったからだ。特定非営利活動促進(NPO)法ができ、全国の自治体が競うように市民活動

た。直下型であったため近郊まで電車で来て、そこから徒歩で被災地に入ることができた。全国から発生後3カ月で100万人超のボランティアが集まった。

この年は、後に「ボランティア元年」と言われるようになった。国も市民も大規模災害には行政の力だけでは対応できない、市民ボランティアや市民組織の力が重要だと思い知ったからだ。特定非営利活動促進(NPO)法ができ、全国の自治体が競うように市民活動



大人も子どもと一緒にミーティング。横須賀災害ボランティアネットワークがことし1月17、18日に市立夏島小で催した寒冷期避難所体験(同ネットワーク提供)

部志郎さん。民間ではYMC A、青年会議所、社会福祉協議会、生協などが集まり、「横須賀災害ボランティアネットワーク」を立ち上

げており、市民活動の中心になっていた。そして市民協働での拠点づくりが検討され、横須賀市立市民活動サポートセン

ターが1999(平成11)年に設立された。2年後には公設公営から公設民営となり、現在に至っている。横須賀災害ボランティアネットワークの現代表・鷹野克彦さんは「阪神淡路大震災、新潟県中越地震を経験し、行政と民間そして企業も含めて震災時の役割が皆に見えてきた。そこでの市民、民

間組織の役割は大きい。私たちの最大の役割は、災害時に役立つ顔の見える関係を常に作っておくこと」と語る。

ボランティア・市民活動の流れの中で、災害は大きな意味を持つ。災害という悲惨な状況の中でも、人は新しい道を模索し、絶望の中からなんとか未来を見出すとする。尊い犠牲の中から生まれた道を大切に育てて行きたい。(横須賀市立市民活動サポートセンター館長・高橋 亮)

## 筆者はこんな人



2010年から、館長。北米YMCA研修で、NPOが市民社会で大きな役割を担っていることに触発され、多様な主体による地域連携を使命として活動中。震災後に「今わたしたちにできること」緊急集会、児童虐待防止「朗読劇ハッピーバースデー」公演、職業上のスキルで社会貢献する「プロボノ」導入、県共催「企業×NPO×大学パートナーシップミーティング」、市共催「生涯現役フォーラム」などをコーディネートしてきた。55歳。

この連載では、市民が主役となる「文化」を育てた活動を紹介します。